

グラスルーツグローバル化セッション  
－草の根・地域からの人類一体化の推進－

広田 秀樹ゼミナール

20K010 井口 夏希	20K016 板垣 新之介
20K019 井良沢 優人	20K023 箆 大輝
20K025 大川 陸翔	20K031 押野見 陽希
20K044 川島 卓巳	20K052 小林 拓生
20K068 瀬沼 隼輔	20K069 曹 博恵
20K070 曾我 大樹	20K105 山口 航輝
21K090 山口 来輝	



## 目 次

はじめに

1. トルコ・メルテェムさんと交流
2. スウェーデン・エミルさんと交流
3. ロシア・スベトラーナさんと交流
4. ベトナム・エンさんと交流
5. ネパール・サンカルーさんと交流
6. インド・ラケシュさんと交流
7. 世界の食文化を取材
8. 悠久祭・「アボガドジュース」・世界の食文化紹介
9. ユニセフ支援
10. 国際理解推進活動：音楽で世界を紹介
11. 国際理解推進活動：「おもちゃ」で世界を紹介
12. 国際理解推進活動：「パン」・「ジャガイモ」で世界を紹介

おわりに

謝辞

## グラスルーツグローバルゼーション -草の根・地域からの人類一体化の推進-

### はじめに

わたしたちのゼミは、草の根・地域から国際交流・国際理解推進活動を進めることで、地域の発展、世界平和を目指し活動している。

現在、ロシアとウクライナの間での戦争が続き、パレスチナとイスラエルの間でも深刻な紛争が発生。多くの市民が悲劇に直面している。世界の地域の人々はみな心配している。

わたしたちは、ウクライナから小千谷市に避難してこられた、エリーナさん、サリーフさんと交流した。

「ロシアとの戦争がはじまり、約 800 万人のウクライナ市民が海外に避難せざるをえない状況になった。日本へは約 2100 名、新潟県には 7 名が避難している」と伺い、とても悲しくなった。

なぜ、人間は戦争をおこし、傷つけあい、無数のとりかえしのつかない不幸を発生させるのか？

どこの国でも、まじめに生活する市民は、戦争など望まないはずである。平和はどうしたら実現できるのか？真剣にこの一点を、ゼミで議論した。

平和への方途を探究するため、世界 30 ヶ国以上の方が共に学んでいる、南魚沼市の大学院大学、国際大学で開催されたフェスティバルに参加した。

そこで、世界中から集まった若者、市民が、それぞれの出身国の歴史、文化、現状を、真剣にかつ楽しく紹介し、お互いが理解し合おうと努力している光景を、目の当たりにし感銘した。

「お互いがよく知りあい学びあい、お互いの立場や思いを理解するとき、おだやかなよい人間関係ができて行く。人間でなりたつ国家の関係も全く同じだ。グローバルな相互理解こそ平和への道」と、確信した。

世界が「お互いをよく知る、知ろうとするスタンス」が平和への道であって、世界が「お互いを知らない、知ろうとしないスタンス」が、偏見、固定観念、敵意、憎悪を発生させ、紛争、戦争につながると考えた。

世界から、地域にこられた多数の方と交流し、よく学び、その方の母国を知ること努力し、そこで得た知見を地域に展開することで、地域から平和創造のために尽力しようと、決意した。

ゼミでは伝統的に、地域国際交流、地域国際理解推進活動、地域国際支援活動などを自由に行うなか、随時、それらを「世界を知るための貴重なきっかけ(ゼミでは Global-related と呼んでいる)」にして、全員が深く関連した世界に関する事項を学習し、全員がそれらを

自由に研究発表し、貴重な「国際教養（Global liberal arts）」として共有し、全員がレベルアップをはかるというスタイルが定着している。

Global-related<世界を知るための貴重なきっかけ>



Global liberal arts<国際教養>



Level-up<ゼミ生全員のレベルアップ>

以下の報告内容は、Global-related→Global liberal arts という流れで、作成されている。

## 1. トルコ・メルテムさんと交流



トルコからこられた、メルテムさんと交流した。メルテムさんから、トルコの歴史、国際関係など幅広く学んだ。

私達が感銘したことは、1890年トルコの「エルトゥール号」が日本の和歌山県沖で遭難したとき、地域の方が救助活動し、69名のトルコ人を救った出来事だった。

トルコではこの話が長く受け継がれ、約100年後、1985年イラン・イラク戦争に日本人がまきこまれ危機に直面したとき、「こんどはトルコ人が日本人を救うときだ」と世論が高まり、トルコは日本人救援のため特別機を飛ばし、215名の日本人を救ってくれた。

メルテムさんから、現在のトルコのバランス外交についても教わった。NATOに加盟するトルコは米国との関係を慎重に維持している。しかし一方、北方の黒海では、大国ロシアと接しているため、ロシアとの安定した関係を保つよう努力していると伺った。

メルテムさんは、「ロシアの方が多く、トルコに旅行に来て交流しているので、トルコ人はロシアに親近感をもっています」と、話してくれた。



### —トルコの歴史—

トルコは、アナトリア半島に位置し、東ヨーロッパと西アジアに接している。トルコが位置するアナトリア半島の歴史は、紀元前までさかのぼる。

アナトリア半島に最初に王国を築いたのは、ヒッタイト人とされている。ヒッタイトの勢力が増した時代、アケメネス系のペルシア民族が統治する時代、アレキサンダー大王の影響を受けた時代など、アナトリア半島は波乱激流の歴史を歩む。

紀元後、ローマ帝国の統治下にはいる。そこで、キリスト教が広まり文化が栄えた。396年、ローマ帝国は西ローマ帝国と東ローマ帝国に分裂した。東ローマ帝国（ビザンチン帝国）は、コンスタンティノープル（現在のイスタンブール）を中心に、栄華を極め、コンスタンティノープルは、世界最大の都市として様々な建造物が作られた。

6世紀、ユスティニアヌス帝の時代、帝国の勢力圏は、地中海全域に広がった。7世紀以降、イスラム勢力との対立が起こる。8世紀後半、イスラムのアッバース朝、11世紀、セルジューク朝と対立した。十字軍の派遣を西欧諸国に要請したときもあった。

1453年、東ローマ帝国は、イスラム勢力によって滅亡した。オスマン帝国が、コンスタンティノープルを、陥落させたのである。コンスタンティノープルはイスタンブールになった。

オスマン帝国は、スレイマン1世の時代、北はハンガリー、南はエジプト、東はインドまで影響を及ぼすほどの大帝国となった。

オスマン大帝国を支えたのがイエニチェリといわれるスルタン直属の部隊である。彼ら

は幼少期から英才教育を受けた者たちであり、高度に訓練された兵だった。鉄砲や大砲といった火薬を用いた武器を取り入れ、強力な軍隊を編成した。

オスマン帝国はイスラム帝国であったが、その内には、アラブ人、スラブ人、ギリシア人といった様々な民族を擁していた。キリスト教やユダヤ教を含めた、多数の宗教が存在していた。オスマン帝国は、これらの宗教に寛容だった。この一点は、オスマン帝国が長く続いた要因と考えられている。

1922年、第1次世界大戦に敗北したオスマントルコ帝国は滅亡する。同年11月、ムスタファ・ケマル・アタテュルクによってスルタン制が廃止され、メフメト6世が退位し、マルタ島に亡命したのである。

アタテュルクは、様々な改革を断行。1924年、近代的な学校の設置。それまでのマドラサを廃止。全国一律の質を保てる教育を志向。1926年、男女同権を確立。1934年。創姓法によって、全国民が姓を持つことを義務化。文字改革も断行。新しいトルコ語として、アルファベット表記を採用。

1938年、アタテュルクはドルマバフチェ宮殿で生涯を終えた。アタテュルクは、現在でも多くのトルコ人に尊敬されている。

2023年10月29日、現在のトルコ共和国は、100周年を迎えた。

### ートルコ的外交と政治ー

第1次大戦後、共和国になったトルコは、アタテュルクの「内に平和、外に平和」の基本方針に従い、国際社会での摩擦を回避し、友好戦略、中立外交を進めた。

第2次世界大戦でも当初、中立国の位置を維持しながら、連合国側の勝利が確実となった1945年2月に、連合国側に参加した。

第2次大戦後の米ソ冷戦時代がはじまると、黒海をはさみソ連と接していたトルコは、難しい対応を迫られる。

国際社会での共産化拡大を恐れた米国は、トルコを対ソ「封じ込め政策」の中に組み込んでいった。1952年、トルコはNATOに加盟。

一方、ロシアや中国とも、バランスをとった外交を長期に持続してきた。その背景があって、例えば、近年では、ロシアから兵器を購入したり、コロナ・パンデミックのときには、中国からワクチンを大量に輸入している。

現在のトルコの政治では、中道右派のAKP（公正発展党）が、影響力をもっている。

### ーエルトゥールル号海難を契機にしたトルコ・日本の親密な関係ー

トルコと日本はとても友好的な関係にある。このきっかけは、100年以上前に起きた海難事故エルトゥールル号海難事件にある。

1887年、トルコのアブドゥルハミド2世は、エルトゥールル号を日本に派遣。オスマン帝国海軍少将ら600名以上が乗っていた。

当時、明治維新後の日本は、ヨーロッパとの不平等条約に苦しんでいたが、トルコも似たような状況にあった。

トルコの特使たちは、明治天皇に謁見したのち、東京に3か月滞在。その後、横浜港を

出発。当時日本は台風季節。

エルトゥール号は、串本町大島檜野崎沖を航海中、台風に遭遇。岩礁に激突し 587 人が死亡。

このとき地域の人達が、不眠不休で生存者の救助に当たった。69 名が、生き残った。

生存者 69 名は、神戸に贈られ治療を受けた。日本全国から、多くの義援金、物資による支援があった。生存者は、無事、イスタンブールへ戻ることが出来た。

その後、地域の有志らによって、檜野崎の地に、土国遭難の碑が建立された。1929 年、昭和天皇が訪れた。

トルコでは、エルトゥール号の 69 名のトルコ人を日本人が救ってくれた話が、長く伝承されていった。

エルトゥール号海難事故・救出から、約 100 年後、1980 年代、中東でイラン・イラク戦争が勃発。多くの日本人がイランにいた。イラク政府はイラン上空全域を戦闘地域とし、民間航空機が攻撃を受ける可能性があることを示唆していた。日本政府は、特別機を出すことが出来なかった。

この危機的状況を救ったのが、トルコだった。トルコは特別機を出し、日本人の退避を可能にし、救ってくれた。

この 2 国間の歴史は、『海難 1890』として映画化された。

## 2. スウェーデン・エミルさんと交流



スウェーデンからこられた、エミルさんと交流した。エミルさんから高度福祉国家スウェーデンについて幅広く学んだ。

スウェーデンでは、医療等の福祉を無料で享受できることを知り驚いた。スウェーデンでは、どんなハイレベルな手術であっても、無料で受けることができるのである。

スウェーデンでは、働く人全員が年間5週間の長期休暇を、とることができることも知った。

IKEA、H&M、ボルボ等、独自の世界的企業を多く生み出し、外資も効果的に導入し経済を豊かに維持し、国民一人一人の生活を真に豊かにしているスウェーデンこそ、日本が目指すべきではないかと考えた。

### ースウェーデンの歴史ー

スウェーデンの歴史は古く、北欧地域で最も古い王国の一つである。ヴァイキング時代(8世紀～11世紀)、スウェーデン人は海上貿易や略奪を通じて活躍した。

ヴァイキング船がヨーロッパやさらに遠くの地域に到達し、スウェーデンの影響力は拡大した。この時期、スウェーデンは複数の小国からなる連邦制を採用しており、各地域は独自の支配者によって統治されていた。12世紀から15世紀にかけて、スウェーデンではキリスト教化が進んだ。

16世紀、スウェーデンはヴァーサ王朝のもとで、経済的な繁栄と軍事的な力を蓄えていった。

1700～1721年の大北方戦争でロシア等に敗北し、スウェーデンは大国の覇権をなくし、衰退期に入る。

20世紀、2度の世界大戦で、スウェーデンは中立政策を維持し、戦争を回避。社会民主労働党が政権を獲得し、スウェーデンは福祉国家としての体制を整え、教育、医療、社会保障などの分野で高い水準を実現していった。

国際社会で、スウェーデンは幸福度や教育、医療の品質などの面で高い評価を受けている。

#### －スウェーデンの福祉・医療－

スウェーデンは、世界で最も包括的な社会福祉制度を誇っている。さまざまな福利厚生を通じて、ゆりかごから墓場まで住民をサポートするその取り組みは、世界的に賞賛されている。

スウェーデンでは、税金によって賄われる公的な保険によって医療費用の大部分がカバーされ、市民が医療費用の心配をする必要がない。

一般的な健康診断や病院の受診から、特殊医療や手術、出産まで、あらゆる種類の医療サービスが、公的資金でカバーされる。

医療施設は、公立病院と民間病院の両方が存在するが、民間病院も公的な保険でカバーされる。

スウェーデンの育児休暇制度は、世界で最も卓越した政策となっている。保護者は子供1人につき、480日の有給休暇を取得する権利がある。この休暇中、親の定期収入のほぼ80%が、カバーされる。

スウェーデンの福祉モデルは、普遍的なアクセスと社会的連帯の原則に基づいて構築されている。

スウェーデンの社会では、住民は税金を通じて貢献し、その見返りとして、政府が包括的な社会的保護を保証している。

すべての個人は税金を通じて福祉国家に貢献する。その見返りとして、政府は、誰もが医療、教育、社会福祉などのサービスに平等にアクセスできることを保証している。

### 3. ロシア・スベトラーナさんと交流



ロシアのスベトラーナさんと交流した。ソビエト時代の生活、ソビエト崩壊以降の 1990 年代の混乱、2000 年以降の発展の様子について伺った。

1990 年代は混乱したが、2000 年以降は経済大国化する中国の資本もふくめ世界から資本を大胆に導入し、安定的に発展しているロシアの状況を理解した。

「ソビエト時代」からの福祉制度が継続され、ロシアでは、医療は無料で、働く人全員が、長期の休暇をとれることを知った。

スベトラーナさんは地域に避難してこられたウクライナのエリーナさんのことを知り、激励、支援にかけつけた。ウクライナのエリーナさんとロシアのスベトラーナさんは、とてもよい友人になった。

この話を伺い、戦争を起こすのは市民ではない。戦争を起こすのは国家の実権をにぎったほんの少数のグループであって、国家間の戦争など、世界各国の市民には全く関係ない、という一点を深く認識した。



### —ロシアの歴史—

9世紀後半、現在のロシアとウクライナの基礎となるキエフ大公国が建国された。キエフ大公国は、現在のウクライナ首都キーウ（キエフ）を都としていた。

1240年代、モンゴル帝国の侵略を受け、キエフ大公国は崩壊した。その後、元帝国の崩壊がきっかけとなって、旧公国領土はリトアニア大公国に併合された。

16世紀、モスクワ大公国が台頭。1721年、ピョートル1世によって大発展したモスクワ大公国は、ロシア帝国になった。その後、エカチェリーナ2世の時代に、ロシア帝国は、オスマン帝国との戦争（露土戦争）にも勝利し、さらに発展した。

20世紀に入ると、ロシアは政治的混乱に直面する。1905年の第一次革命、第1次世界大戦勃発、参戦の中で、国内問題は悪化した。

1917年、2月革命、10月革命を経て、レーニン率いるボリシェヴィキが権力を掌握し、史上初の社会主義国家、ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国が成立。

1924年1月、レーニンは死去。スターリンが権力を掌握すると、工業化、集団化が推進された。

1939年、第2次世界大戦が勃発。1941年6月、独ソ戦が開始。2千万人もの犠牲を出し、ソ連は戦闘に勝利。ソ連ではこの大戦を「大祖国戦争」と呼んでいる。

1945年、第2次大戦が終了し、世界は米ソの冷戦時代へと突入。アメリカは北大西洋条約機構（NATO）を設立。ソ連は対抗する形で、ワルシャワ条約機構を設立。

1950年代以降、ソ連は経済力、軍事力、科学力を伸ばした。1957年、人類史上初の人工衛星を実現した。1961年、世界初の有人宇宙飛行を成功させた。

1980年代、経済の「停滞状況」が顕在化。これを打開しようとして、ゴルバチョフはペレストロイカ、グラスノスチ、新思考外交などに象徴的な、大胆な政策転換を推進。

しかし、この改革の試みは、予想外の展開を招いた。1991年、ソ連は崩壊した。

## ーロシアのウクライナ侵攻に関する考察ー

2014年、ロシアはウクライナ共和国内のクリミア自治共和国に軍事進攻した。親ロシア派のセルゲイ＝アショーノフが同地を統治。

冷戦終結以降、ロシアは、1999年以降の「NATOの東方拡大」に対して、警戒感を強めていた。

ロシアは米国に対して、「これ以上拡大をするならば、それ相応の行動をする」と、警告・シグナルを送っていた。

2022年2月、隣国ウクライナがNATO加盟を検討していることに対して、ロシアは、ロシア・ウクライナ国境沿いの親ロシア派の住んでいるドネツク州などを一方的に併合し、ウクライナ政権を転覆させることを目的とし、首都キーウにも侵攻した。ロシアとウクライナは事実上戦争状態に突入した。

ウクライナ・ロシア双方で、多大な犠牲者が発生。ウクライナから外国への避難者は、800万人以上となった。

住む場所、働く場所を失った人々、家族や友人を失った人が大勢いる。戦争が終結する兆しはいまだ見えていない。我々は決して、このウクライナで起こっている現状から目を背けてはならない。

## 4. ベトナム・エンさんと交流



ベトナムからこられた、エンさんと交流した。エンさんとの交流で、ベトナムについて多く学ぶことができた。

ベトナムは、約1000年間中国から影響を受けた歴史から、「東南アジアでただ一つの漢字文化圏」となった史実を知った。

1800年代のフランスの影響で、文字は漢字から「フランス語型文字」になったことも理

解した。

ベトナムでは1986年から、「ドイモイ（刷新）」という新しい政策がはじまり、市場経済の導入、外資の導入が大胆に進められ経済が発展した詳細を伺った。

### ―ベトナムの歴史―

中国の各王朝は、秦の始皇帝以来、中国南部に隣接するベトナムに対する支配を及ぼしてきた。

ベトナム人は中国の支配を受け、漢字文化圏に属して文化を形成した。約1000年に及ぶ、中国によるベトナム支配の時期を、ベトナム史では「北属期」と呼ばれている。

11世紀初め、自立したベトナムの王朝が成立。1009年、李朝が成立。1054年以降、国号を大越国と称し、ベトナム最初の長期王朝となる。

16世紀から18世紀、内乱の時代。1802年、阮福暎がベトナムを統一し、1945年まで続く、阮朝を成立させた。1804年、越南（ベトナム）という国号が生まれた。

1862年、サイゴン条約によって、ベトナム南部の一部がフランスの直轄領になる。1883年、フエ条約によって、ベトナムはフランスの保護国となる。

1940年、第2次世界大戦下の欧州で、フランスがドイツ軍に占領されたことから、ドイツの同盟国・日本が北部ベトナムに進駐。さらに、1941年、南部ベトナムも占領。

1945年、第2次世界大戦終戦後、ベトナム民主共和国が成立。しかし、フランスとの独立戦争、インドシナ戦争に突入。1954年、ディエンビエンフーの戦いで、フランスは敗北し、ベトナムから撤退した。

その後、米国が介入。ベトナム民主共和国（北ベトナム）は、米国が後援する南ベトナムとぶつかり、ベトナム戦争となる。

1973年、ベトナム和平協定が成立し、米軍はベトナムから撤退を開始。1975年、南ベトナムのサイゴンが陥落し、ベトナムは統一された。

1979年、ベトナムは、隣国カンボジアのポル＝ポト政権と対立し、軍を侵攻させる。これに反発した中国との間で、中越戦争が勃発。

1986年、ドイモイ政策を開始。市場経済化、開放経済化によって発展を志向。1995年、ASEANに加盟。

### ―ドイモイ政策―

「ドイモイ」とは、ベトナム語の「dôi（変える）」と「moi（新しい）」を組み合わせた言葉である。ドイモイ政策のポイントは3つある。

第1に、資本主義型市場経済の導入。しっかり働くほど、豊かになることができ、私有財産も持てるようになった。みな懸命に働き、生活が豊かになる人が増えた。

第2に、開放経済化。ベトナムに、モノ、投資、人材などが、世界から入ってくることを可能にした。1995年にはASEANへ加盟し、開放経済化をさらに、加速させる。

第3に、国民の生活に必要な産業への投資。政府の経済介入、リード、主導の要素を、残した。

ドイモイ政策は、効果を発揮した。ドイモイ政策から3年後の1989年、ベトナムは、世

界第3位の米輸出国になった。

一方、ドイモイ政策の推進によって、人口が一部の都市部へ集中。過密状態等、急発展の副作用、代償ともいえる問題も発生している。

## 5. ネパール・サンカルーさんと交流



ネパールからこられた、サンカルーさんと交流した。サンカルーさんは、最もネパールを代表する料理、「ダルバート」を私たちのために、特別につくってくれた。

サンカルーさんは、ネパールは「ヒマラヤという、雄大な世界レベルの自然資源に恵まれ、歴史が長く独自の文化がある国なので、世界から多くの人にきてほしい」と、語ってくれた。

2008年、長く続いた君主制を終了し、共和制に移行した事情も伺った。



#### －ネパールのヒンズー教文化－

ヒンズー教はネパールの国教。ネパールの人口の90%はヒンズー教徒。7～8%は仏教徒。ネパールでは、ヒンズー教と仏教が融合している面がある。

両宗教の教え、考え方、解釈が相互に浸透していること面がある。また、一人が複数の宗教に属することがある。

ヒンズー教ではシッタールタをヴィシュヌの化身とみなしている。誰もが自分なりの方法で宗教活動に参加している。

#### －ネパールの仏教文化－

釈迦はネパールのルンビニで生まれた。仏教はネパールで重要な位置を占めている。ネパールにヒンズー教が伝わる以前から、仏教はネパールに広がっていた。

現在、カトマンズ渓谷には、ネパール仏教の栄華を物語る、仏教建造物が数多くある。ネパールの仏教は大乗仏教で、菩薩の教えに従うことで「涅槃」に至るという考え方が中心となっている。タマン族、グルング族、シェルパ族など高山に住む民族や部族を中心に仏教が浸透している

近年、ユネスコの支援を受け、釈迦の生誕地、ルンビニ園の修復が進行している。

#### －ネパール新憲法－

2015年、ネパールは新憲法を制定。新憲法は、国家を連邦民主共和国と定めている。国を7つの連邦州に分割する。大統領は、議会の多数派のリーダーが務める。

#### －経済全般－

ネパールは農業国。国連が特定した47のLDCの1つ。ネパール経済は対外援助に大

きく依存している。予算の約 5 分の 1 は外国からの寄付や融資から。

ネパールの主な産業は、農業、観光業、繊維、革靴、食品加工、タバコ、ジュート加工、レンガ生産、プラスチック製品など。

### —農業—

農業はネパールで最も重要な産業。GDP の約 33%を占める。農業人口はネパールの総人口の約 80%。ネパールの主要な食品作物は、米、トウモロコシ、小麦、そば、ジャガイモ、サトウキビ、ジュート、綿、ナツメグ、ショウガ、ニンニク、ウコン、唐辛子など。

### —観光産業—

ネパールはヒマラヤ山脈の南に位置し、快適な気候である。ウォーキングツアー、登山産業が発達。

## 6. インド・ラケシュさんと交流



インドのデリーからこられた、国際派シェフ、ラケシュさんと交流した。ラケシュさんは、世界の人口大国になったインドでは教育が重視され、みな勤勉でハングリーでよく働き、必死に働いてきた結果、2000 年以降急発展し、世界第 5 位の GDP の経済大国になったと、話してくれた。

世界を股にかける国際派シェフ、ラケシュさんは「世界には素晴らしい食文化がある。食文化をお互いに体験すれば、お互いに親近感をもちおだやかになれる。『世界の食文化を知ることは平和への道』だよ」と、教えてくれた。

「世界の食文化を知ることは、平和への道」という、ラケシュさんの考えに感動し、「地域で体験できる世界の食文化」を徹底して取材し、市民の方にそれを伝えることに挑戦しようと考えた。

#### ーインドの基本データー

- 国土面積：約 328 万平方キロメートル
- 人口：約 14 億人
- 首都：ニューデリー
- 宗教：ヒンドゥー教徒 79.8%、イスラム教徒 14.2%、キリスト教徒 2.3%、シク教徒 1.7%、仏教徒 0.7%、ジャイナ教徒 0.4%
- 主要産業：農業、工業、IT 産業
- GDP：約 3 兆 3,851 億ドル
- 一人あたり GDP：約 2,389 ドル

#### ーインドの歴史ー

インドの歴史は世界で最も長い。紀元前 2,600 年頃からのインダス文明、多数の古代王国群成立の時代を経て、1526 年からは、ムガル帝国がインドで影響力をもつ。

フマーユーン廟、タージ・マハルなどの、世界遺産レベルの大建築に象徴的なように、ムガル帝国は栄華を実現した。

1858 年、ムガル帝国は、その歴史は終了。1858～1947 年、イギリス領インド帝国の時代が続く。

ガンディーが独立運動を開始。ガンディーは、「スワラージ（独立・自治）」・「スワデーシー（国産品愛用）」をスローガンに掲げた。1947 年、英国領より独立。1950 年代以降、インド国民会議派（ कांग्रेस ）が、長期間政権を担当。

1998 年、インド人民党（BJP）を中心とする連立政権が成立。2004 年まで維持した。2004 年～2014 年、インド国民会議派（ कांग्रेस ）を第一党とする連立政権の時代だった。

2014 年、インド人民党（BJP）政権が成立。2019 年、インド人民党（BJP）政権（第 2 次ナレンドラ・モディ政権）が成立。

#### ーインドの外交ー

インドは、冷戦期の「ネルー外交」の伝統が継続し、「非同盟・全方位外交」を志向する傾向がある。近年、日本・東南アジア・米国・オーストラリアと共に、「自由で開かれたインド太平洋戦略（Free and Open Indo-Pacific Strategy:FOIP）」を推進。しかし一方、ロシアとの伝統的な友好関係も維持。また、急速な経済発展を実現した中国との関係も、維持している。

#### ーインドの経済政策ー

インドは独立以来、輸入代替工業化政策を進めてきた。しかし、1990 年代以降、経済自

由化、開放政策に転換。規制緩和、外資導入を活発化させる。2000年以降、その政策転換の成果が、見事に現出。

2005～2007年、3年連続で9%台の成長率を達成。近年の数値をみても、2014年・7.4%、2015年・8.0%、2016年・8.3%、2017年・6.8%、2018年・6.5%と、高い成長率を維持。

## 7. 世界の食文化を取材

世界を股にかけるインドの国際派シェフ、ラケシュさんから、「世界の食文化を知ることには、平和への道」とい教わり、「地域で体験できる世界の食文化」を、徹底して取材し、市民の方に、それを伝えることに挑戦した。

以下は、取材した「地域で体験できる世界の食文化」の一部である。

### ータジキスタン料理・サンプサー



パイ生地の中に肉や野菜が入っている料理。インドなどではサモサという名前で見かけることが多い料理だが、違いはコリアンダーの葉の有無にある。サンプサにはコリアンダーの葉が入っていないため、クセが少なく万人受けするような味となっていた。

#### ータンザニア料理・ピラウー



見た目は炒飯のようだが、クミンなどの香辛料が効いた料理となっている。

タンザニアのザンジバル島は「スパイスアイランド」と呼ばれるほど、多くの香辛料が入手できる土地である。

タンザニアは、ナツメグ、ブラックペッパー、バニラビーンズ、シナモンなど種類も豊富で、このピラウにも、多くの香辛料が使われている。

#### ーモンゴル料理・ホーショールー



モンゴルの揚げ餃子である。普通の揚げ餃子とは違い、ジンギスカンを使用しているため、独特な風味となっている。モンゴルの食堂や屋台などで見かけることも多いといわれているポピュラーな料理で、モンゴルの人々にとっては馴染み深い料理である。

## ーメキシコ料理・ポソレー



トウモロコシを使用したスープ。地域や家庭によって食材も様々で人参やキャベツ、ラディッシュなどを入れる地域もある。

スープの色も白、赤、緑など様々で今回フェスティバルで食べたポソレはチリのペーストが用いられていたため赤色となっていた。

メキシコ料理では珍しくトルティーヤと一緒に食べることがない。理由としてはこのポソレに使用されているコーンがカカワシントレと呼ばれる粒が大きく珍しいコーンであることから、特別な料理という扱いとなっており、ポソレ単体で食べられることが多い。

## ートルコ料理・ライス・プディングー



お米を甘い牛乳で炊くという、トルコでは伝統的な料理。

ーネパール料理・ダルバートー



最もネパールを代表する料理。ネパールでは、「ダル」とは「豆」、「バート」は「お米」を意味する。

ネパールでは、大きなワンプレートに自分専用の食べ物をおきそれのみを食べるという「マイ・プレート・オンリー」の食事作法が基本。

「複数の人が複数の皿の料理をとる」食事作法はとらない。

ーベトナム料理・バインベオー



バインベオはベトナム中部の都市であるフエに数ある名物料理の一つでフエの宮廷の料理。

米粉とタピオカを混ぜた料理を蒸し、干しエビや上げた豚の皮を乗せ甘じょっぱい味付けで小皿に入っている一口料理。

#### ーベトナム料理・バインボツロックー



デンプン生地やタピオカで作る生地に、エビや豚を入れゆでて作る料理。

#### ーベトナム料理・フォーー



ベトナムの代表的な麺料理。麺は米粉で作られている。

### ーベトナム料理・ゴイクオンー



ライスペーパーを使って作るベトナムの春巻き。具材は野菜、エビ、豚肉を使う。中華風の春巻きと違い、油で揚げない。

### ーベトナム料理・バインミーー



フランスパンに具材を挟んだ、ベトナムのサンドイッチ。ベトナムには、バインミーの屋台がたくさんある。「ベトナムのファストフード」で、国民食と呼ばれるほど、人気がある。

古来、ベトナムでは、パン（ブレッド）を食べる文化はなかったが、19世紀中期以降のフランスからの影響で、ブレッドを食べるといふ、フランスの文化が伝わり、バインミーの文化ができた。

## ーベトナム料理・ベトナムコーヒーー



独自のフィルターを使い、コーヒーを抽出するのが、ベトナムコーヒー。「甘いコーヒー」のため、デザート感覚で飲む人が多い。ベトナムコーヒーも、フランスからの影響で生まれた食文化である。

## ーインド料理・タンドリーチキンー



ヨーグルトや様々なスパイスに、鶏肉を漬けて作る料理。カレー風のスパイス、ヨーグルト風のスパイスなどが融合し、見事なテイストを実現する。

「タンドール」という「円筒形の窯」で焼いて作ることから、タンドリーチキンと呼ばれるようになった。「タンドール」の質や使用した期間によって、風味や味まで変わるといわれている。

長時間使いこまれた「タンドール」は、味や香りがしみ込んでおり、おいしいタンドリーチキンが焼きあがる。

## ーインド料理・ビリヤーンー



米、鶏肉、羊肉、魚、野菜、様々なスパイスを加えて炊き込んで作られる料理。

## 8. 悠久祭・「アボガドジュース」・世界の食文化紹介



悠久祭に出店した。ゼミナールの当初の活動が、主に市内の海外料理店を回り、食を通じての国際交流だった。

そこから、地域の方々に食で国際交流をしてもらいたいため、悠久祭で海外の料理を出店したいと、みなで考えた。

まず、どの料理を悠久祭に出品するのか決めるために、外国人の方に聞いたり、インターネットで検索したり、催しに参加して探索した。

料理を作るにして、「日本にはない感じ」、「おいしい」、「簡単に作れる」の3つを重点にして探した。

まず、料理の候補として挙がったのが、「サバサンド」である。「サバサンド」はトルコ名物の料理で魚の鯖にパンを乗せた料理である。

トルコからこられたメルテムさんから話を聞き、いいなと思った。しかし、鯖を焼く方

法や器具はがなく、候補から除外した。

続いて、料理の候補に挙がったのが「サンプサ」である。「サンプサ」は5月に参加した国際大学のフェスティバルで発見した。

「サンプサ」は中国から西にある国、タジキスタンの料理である。パイ生地に卵を塗り、パイ生地の中に牛肉や野菜を入れ、オーブンで20分ほど焼いた料理である。作り置きができ、大量に作れば、当日は提供するだけだと考え、出品しようと考えたが、悠久祭の料理の出店は作り置きが原則禁止であったため、出品を断念した。

出展の食品が、なかなか決まらない中、広田教授から、過去に悠久祭でゼミナールとして出店した飲食として、世界のお酒を紹介したことや、スリランカから直接スパイスを仕入れ、カレーを作った話を伺った。

ここから、飲み物がいいのではと考え、インターネットで検索して探した。その結果、日本人がめったに、飲んでいない「アボカドジュース」を発見し、これを悠久祭に出品することに最終決定した。

アボカドジュースは、アボカドをミキサーで混ぜ、バナナや蜂蜜などをかけて甘くした飲み物である。

アボカドはペルーやメキシコといった主に気温が高い熱帯地域や乾燥地帯の国で飲まれている。

アボカドは苦いイメージがあるが、栄養が豊富な食べ物。疲労回復効果があるビタミンB群を多く含み、食物繊維が豆腐やナッツより多いため、腸内環境を整えるのに良い食べ物。

悠久祭で出店したアボカドジュースでは、メキシコ産のアボカドを使用し、ガムシロップとバナナをいれ、アボカドの風味を残しつつ、甘くしたものを1杯100円で販売した。

悠久祭当日、アボカドジュースのほかに、「世界のおもちゃ」の紹介や、「世界の音楽」を流しながら、販売活動を行った。1日だけの出店だったが、老若男女幅広い世代の方々が飲んでくれた。

飲んでくれた人においしいと言われ、とても嬉しかった。多くのお客様の中で、若い頃に、アボカドジュースを飲んだことがある男性と交流した。そのお客様は、アマゾン川でアボカドジュースを飲んだと、語ってくれた。その方から、アマゾン川で起きた体験談を聞くこともでき、「そこで飲んだものより、おいしいよ」と言ってもらい、感動した。

ゼミ生は、アボカドジュースについての説明で、その他、ゼミ活動で学んできた「世界の知識」を、地域の方に解説し、楽しく交流することができた。

悠久祭での活動を通して、海外料理を取材し、紹介する活動から、自分たちで海外料理を作って、販売する活動まで、発展させることができ、労苦を突破する体験、地域の方によるこんでもらえる嬉しさといった、貴重な体験を、積むことができた。

地域で海外料理店を営んでいる方たちは、地域の方から、「おいしい」と言われることを、生きがいにもされ、頑張っているのだということが、理解できた。ゼミ生は、料理店を経営する側としての立場を体験できた良い機会だった。

## 9. ユニセフ支援



戦争など世界の不安定状況で、最も被害をうけるのは子どもである。ユニセフは被害を受けている子どもを支援する、国際機関。

悠久祭のアボガドジュース販売で得た利益を、世界の子供たちを応援するため、ユニセフに募金した。

### —ユニセフの歴史—

1946年、国連国際児童緊急基金（UNICEF）は設立された。第2次世界大戦後、世界中の多くの国が大規模な破壊と人道危機に直面し、特に子供たちは大きな困難に直面していた。

ユニセフは、食料、医療、その他の緊急支援を提供することで、子供たちを支援した。時間の経過とともに、ユニセフの使命は、健康、教育、平等、保護を含む子どもたちの包括的な発達を促進する活動へと徐々に進化していった。

ユニセフの財政的支援は、政府、非政府組織、企業、個人からの寄付によって成り立っている。

この組織は、広範なパートナーシップと世界的な活動を通じて、子供たちの生活条件と幸福を改善し、世界中の子供たちの将来により良い条件を作り出すために取り組み続けている。

### —ユニセフの主要任務—

- 小児予防接種、母子保健などの基本的な医療サービスの提供
- 良好な栄養状態を促進し、子供たちに十分な栄養と安全な飲料水を確保
- 緊急教育サービスの提供を含め、世界中で質の高い教育を促進および支援
- 貧困、差別、不平等の連鎖の根絶
- 子どもへの暴力、虐待、搾取の根絶
- 子どもが安全で愛情深く敬意を持って成長できるような、子どもに優しい社会の実現

## 10. 国際理解推進活動：音楽を通じて世界を紹介

「地域国際交流活動」を中心に学んできた、視野の広がりをも、工夫して、地域で伝える、「地域国際理解推進活動」に挑戦した。



つくば開成高校では、世界の音楽文化を通じて、世界各地を紹介した。インドネシアのガムラン、ロシアのチャイコフスキー、イタリアのカンツォーネなど、世界各国の独自の音楽を高校生にきいてもらい、世界の国々に親近感をもってもらった。

世界のそれぞれの国には、素晴らしい音楽文化がある。それらを、お互いに鑑賞し、知るとき、心は平和になると訴えた。

### —世界の音楽文化—

世界には素晴らしい音楽文化がある。それを互いに知り、文化の交流をすることで、お互いの良さを理解することができる。

音楽は「世界共通の言語」である。世界の言葉はみな違う。しかし、音楽は、言語の壁を超える。音楽は、人に感動を届けることができる。

互いの音楽文化を知ることによって、偏見、差別、嫌悪、敵意が、理解、敬意、共生と平和な心の志向へとかわる。

## 11. 国際理解推進活動：「おもちゃ」を通じて世界を紹介



市内でおこなわれた「オトナコども祭り」で、フランス、韓国、ドイツ、ロシアなど、世界のおもちゃを紹介し、未来を担う子どもたちに、世界を身近に感じてもらった。

### — 紹介した世界の「おもちゃ」・「遊び」 —

- ドイツ「ハリガリ」：お題に書かれた通りに手持ちのカップを並べる遊び。
- ロシア「ナンジャモンジャ」：山札から引いたカードのあだ名を決めて、同じカードを引いたら、そのあだ名を早く言った方が勝ちという遊び。
- アメリカ「ライトニングリアクションリロード」：心理的な感覚が研ぎ澄まされ、電気が流れる遊び。
- フランス「スライドクエスト」：手元の駒をプレイヤー4人と協力しゴールへと運ぶ遊び。

### — 世界の「おもちゃ」・「あそび」文化 —

- ギリシャ「コルキドゥキア」：ギリシャの伝統的な遊びの一つ。コルキドゥキアは小さな石や小豆などを使って、手の中でのさばく遊び。子供たちは集中力や手先の技術を養うことができる。
- インド「カバディ」：インドを中心に広まった人気のある遊び。2つのチームが線を境にして交互に攻撃と防御を行う。体力と協力プレーの重要性を学ぶことができる。
- ケニア「あやつり糸」：木製の輪を糸でつなげたもので、指や手の動きで織り成す美しい

模様を作る。子供たちは創造力や集中力を育むことができる。

- メキシコ「ティルマ」：メキシコの伝統的なおもちゃ。木製のパドルに取り付けられた紐の上で回転するオブジェ。回転するティルマを上手に操作するためには、バランス感覚と手先の技術が必要である。

## 12. 国際理解推進活動：「パン」・「ジャガイモ」を通じて世界を紹介



高齢者センターで、国際理解推進活動に挑戦した。戦国時代、ポルトガルと交流があった日本では、「ポルトガル語のパン」が広まったことを伝え、戦国時代からつづく、日本とポルトガルの長い関係について解説した。

江戸時代、オランダと交流があったことがきっかけで、東南アジアのオランダ領・インドネシアのジャカルタでとれる「おいも」が日本につたわり、「ジャカルタからきた『おいも』」を意味する「ジャガイモ」として広まったことを伝えた。

人生の大先輩であるシニアの方は、「世界は、そんなふうに、お互いに、つながってるんだね。ならば、戦争なんかせずに、うまく、生きていけば、いいんだ」と、感想を語ってくれた。

### －「パン」からみる「ポルトガルと日本の関係」－

1549年、ポルトガル王ジョアン3世の命で、アジアへの布教を推進していた、フランシスコ＝ザビエルが、日本に上陸した。

この時期より、ポルトガルと日本の関係が緊密になって行く。日本に来たポルトガル人は西欧・ポルトガルの文化を、多数、日本に伝えた。

その中の一つが、ポルトガル人が「パン」と呼んでいた食べ物だった。「パン」は、日本に食べ物として、広まっていった。

なお、ポルトガルは、1500年のカブラルのブラジル上陸を契機に、ブラジルでの植民地開発を開始していた。

また、1557年、ポルトガルは当時、東アジアの大国・明から、1557年以降、マカオを賃貸し「ポルトガル領マカオ」とし、東アジアへ進出していた。

### ー「ジャガイモ」からみる「オランダと日本」ー

1600年、オランダ人・ヤン＝ヨーステンを乗せた、オランダ船リーフデ号が、日本に漂着したときから、日本とオランダの親密な関係は始まる。オランダは、徳川時代の日本にあって、貿易関係を許可された唯一の西欧国となった。

1600年代前半、オランダは世界に進出していた。オランダ植民地都市・ニューアムステルダム（現在のニューヨーク）を、建設するのもこの頃だった。

オランダは、東アジアで、オランダ東インド会社（VOC）を中心に、現在のインドネシアを、「オランダ領東インド」として発展させていった。

オランダ人が拠点としていた、ジャカルタ（バタヴィア）から日本に「おいも」が輸出されていた。

これが、ジャカルタからおいも、「じゃがたらいも」と呼ばれ、現在の「ジャガイモ」になった。

江戸時代の向学心に燃える人たちは、「オランダから伝わる世界の知識」を「蘭学」として、必死に勉強した。

### おわりに

地域国際交流活動、地域国際理解推進活動、それら活動を契機にした、世界に関する関連学習、Global liberal arts の拡大など、今年度のゼミ活動を通じて、ゼミ生全員が、以下のような感想をもった。

「世界は、こんなにも広く、多様で、知らないことがまだまだたくさんあり、刺激に満ちあふれ、美しい。もっともっと、世界の様々な文化、様々なもの、ことに、直接ふれてみたい」。

ゼミ生を、これほど感動させる、わたしたちの世界で、いまだ戦争、紛争などの、人間にとって最悪の悲劇は続いている。

いつの時代も、戦争、紛争を始めるのは、国家・組織の権力を握ったほんの少数の上層部ではないか。

平和に生活する圧倒的多数の市民は、どこの国家や組織に属していようが、断じて戦争や紛争など、望むわけがない。

市民のだれが、命を失うかもしれない、仕事を失うかもしれない、身体や精神を、づたづたにされるかもしれない、戦争を望むというのか。

世界は、国家・組織の権力を握った少数の上層部の占有物では、絶対ない。世界は、世界市民みなのものである。

世界とは、個々の世界市民の、世界市民全体の、人間の『頭脳・心からの判断、行動、振る舞い』の総体である。世界は、人間で、できている。

世界中の人間の交流、世界中の文化の相互理解を通じて、平和を目指す、国際的平和機関、ユネスコの憲章には、「人間の心のなかに『平和のとりで』を、築かなければならない」

とある。

わたしたちはこれからも、草の根、地域から、世界の市民の交流、文化の相互理解を推進し、「人々の心に『平和のとりで』をつくる」ことで、地域の発展と世界平和を目指して前進する。

## 謝辞

今年度のゼミ活動にお力添えして下さった方々、全員に御礼申し上げます。

特に、ゼミのアドバイザーとして応援してくださっている、グリーン・フィロソフィー代表大出恭子様、フェアトレードショップ・らなあぷうオーナーの若井由佳子様には、お世話になりました。心より感謝申し上げます。

